

中学運動選手における心理社会的発達課題の達成と心理的競技能力

Achievement of psychosocial developmental tasks and psychological competitive ability
of junior high school athletes

竹之内 隆 志* 大 畑 美喜子**

Takashi TAKENOUCHI * Mikiko OOHATA **

This study examined the relationship between achieving psychosocial developmental tasks and psychological competitive ability in athletes. Participants were 216 junior high school athletes (119 boys and 97 girls, mean age 13.65 years). A questionnaire was used to assess the level of achievement of seven psychosocial developmental tasks: trust, industry, identity, intimacy, psychological weaning, masculinity, and femininity. Psychological competitive ability was evaluated using the Diagnostic Inventory of Psychological Competitive Ability for Athletes (DIPCA; Tokunaga and Hashimoto, 2000). Correlation and multiple regression analyses indicated that the achievement of psychosocial developmental tasks was in general, positively associated with psychological competitive ability of athletes. In addition, multiple regression analyses indicated that in boys, masculinity and trust, and in girls, masculinity, identity, and psychological weaning were closely associated with psychological competitive ability.

序 論

スポーツ選手が試合で優秀な成績を収めるためには、技術・体力的側面とともに心理的側面の強化も必要と考えられている。そして、心理的側面を強化するためには、どのような心理的側面の強化が必要であるのかをまず明らかにしなければならない。これらのことから、徳永（2001；徳永・橋本，2000；徳永ほか，1991）は、スポーツ選手が競技場面で実力を発揮するために必要な心理的能力に着目し、それを心理的競技能力と呼び、測定・診断のために、競技意欲、精神の安定・集中、自信、作戦能力、協調性の5因子および各因子を構成する12の下位尺度からなる心理的競技能力診断検査を開発している。

近年では、この検査結果に基づいて心理的競技能力を強化する試みが行われており、強化の方法としてはリラクゼーションや集中、イメージなどの心理的スキルトレーニングを行うことが一般的となっている。例えば、徳永（2001）は、精神の安定・集中の下位尺度であるリラクセス得点が低い選手には緊張しすぎることがあるので、リラクセスのトレーニング法を指導し、集中力の

低い選手は集中力が不足したり、集中力が切れないように集中力のトレーニングが必要となる、と述べている。このような心理的スキルの指導による心理的競技能力の向上を報告する研究は多く、心理的スキルトレーニングは心理的競技能力の強化に有効と考えられる。しかし、心理的スキルトレーニングは専門的知識を持つ人の指導がある程度必要であり、簡便な方法とはいえない。また、心理的スキルトレーニングを実施しなくても心理的競技能力の高い選手は存在しており、そのような選手は何らかの経験を通して心理的競技能力を高めてきたと推測される。これらのことから、心理的スキルトレーニングに着目するばかりでなく、それ以外の心理的競技能力を高める経験を明確にしていくことも有益と考えられる。

本研究では、そのような経験として心理社会的発達課題の達成に着目し、心理社会的発達課題の達成と心理的競技能力との関連について検討する。心理社会的発達課題とは、人が発達するために個々の発達段階で獲得・達成すべき心理社会的特質のことである。例えば、エリクソン(1973, 1977)は、人間の発達を記した漸成的発達図式において、人が人生において遭遇する心理社

* 名古屋大学総合保健体育科学センター
** 川辺やすらぎクリニック
* Research Center of Health, Physical Fitness and Sports, Nagoya University
** Kawabeyasuragi clinic

会的発達課題を提示し、それらを順次達成していくことで健康なパーソナリティが形成されると述べている。このように心理社会的発達課題の達成は人の心理的発達に寄与するものであり、心理的競技能力といった心理的構成概念の発達にも関連することが予想される。なお、本研究で取り上げた心理社会的発達課題は、信頼性、勤勉性、同一性、親密性、心理的離乳、男性性、女性性の7つであり、青年期までに人が直面すると考えられる心理社会的発達課題である。勤勉性から女性性までの6つの心理社会的発達課題は、運動選手の自我発達に関連する心理社会的発達課題と指摘されており(竹之内ほか、2012; Takenouchi et al., 2004)、運動選手の他の心理面の発達との関連も推測されることから取り上げた。また、信頼性については、エリクソン(1973, 1977)の漸成的発達図式において第一段階の心理社会的発達課題とされ、人の発達にとって基本的なものであるため取り上げた。なお、以下では「心理社会的発達課題」を「発達課題」と略して記す。

方 法

1. 対象者

5つの中学校の運動部所属者に対して調査を実施した。中学での生活経験の長さを考慮して、原則2・3年生を調査対象者としたが、3月に調査を実施した中学校の1年生は約1年の中学生生活経験があるため対象者に含めた。調査対象者のうち、発達課題などの中核的な調査内容の項目に記入漏れなどの不備のあった者を除き、最終的に216名(男子119名、女子97名)の中学選手を分析対象者とした。分析対象者の平均年齢は13.65歳、SD = .61(年齢未記入者1名を除いて算出)で、実施種目や競技レベルは様々であった。

2. 調査内容

調査は「運動選手の意識調査」と称して実施され、性別、年齢などの基本的属性ならびに様々な心理面や経験などが調査された。そのうち本研究で分析に用いた変数は以下のものである。

1) 発達課題の達成度

信頼性、勤勉性、同一性、親密性、心理的離乳、男性性、女性性の7つの達成度を測定した。このうち、信頼性、勤勉性、同一性、親密性はエリクソン(1973, 1977)によって提唱された発達課題の一部であるが、中西・佐方(2001)は、各々を以下のように定義している。信頼性は「他者を含めた周りの世界に対する信頼感、および自己への信頼感(自信)」、勤勉性は「目標を実現するために自分の技能を発揮することによる、自尊感情を伴っ

た効力感」、同一性は「自分という存在を明確に理解し、人生をどう生きたいかをしっかりつかんでいる感覚」、親密性は「自分を見失うことなく、他者と親密な付き合いができ、孤独感を感じないでいられる状態」のことである。さらに、中西・佐方(2001)は、エリクソンが提唱した発達課題の達成度を測定するエリクソン心理社会的段階目録検査日本語版(EPSI)を作成しており、この検査に含まれる上記4つの発達課題に対応する下位尺度(各々7項目)を用いて個々の発達課題の達成度を測定した。なお勤勉性の項目に、「私は、いっしょうけんめいに仕事や勉強をする」というものがあつたが、中学生にとって「仕事をする」は意味内容が明確でなく、また、勤勉性は「勉強」だけに発揮されるものではないと思われた。そこで、「仕事や勉強をする」の部分を「物事に取り組む」に変更して用いた。

心理的離乳については、西平(1990)は一次から三次に分けているが、思春期から青年中期の第一次は親からの離脱、依存性の払拭に重点があり、青年中期から青年後期の第二次では自律性に重心が移ると述べている。また、第三次については対決する人は多くはないが、本来の自分らしい生き方の確立を第三次としている。このように心理的離乳にはいくつかの側面があるが、本研究では、第一次の特性、すなわち、親からの離脱、依存性の払拭という課題に着目した。この課題は、Blos(1967; ブロス, 1971)の第二の個体化などの概念の中でも青年期の発達課題とされている。そこで、類似した概念の研究も参照し、心理的離乳の達成度は、岡本・上地(1999)が作成した親イメージ尺度のうち、親に対する心理的依存からの離脱を示す脱依存因子に含まれる項目から5項目、および上地・上地(2004)の作成した日本版心理的分離質問票(PSI)のうち、親からの機能・情緒面での自立因子に含まれる項目から2項目を採用し、計7項目を用いて測定した。なお、これらの尺度と質問票は対父親と対母親の2種類が作成されており、「父親・父、母親・母」の言葉が項目に用いられていたが、本研究ではそれらの代わりに「親や周りの大人」という言葉を用いて、これらの人たちからの全般的な心理的依存性の離脱の程度を測定した。

男性性と女性性については、本研究では、各々男性と女性に望ましいと一般的に期待される特性と定義し、二つを総称する場合には性役割と呼ぶ。この性役割の達成度は、日本版BSRI(安達ほか、1985)を用いて測定した。泉(2003)は、大学生および社会人を対象者として、日本版BSRI(安達ほか、1985)の各項目について男性にとっての望ましさと女性にとっての望ましさを評定させ、日本版BSRIの因子を検討している。この結果を参考として、男性にとっての望ましさの評定値を用

いた因子分析で男性性因子に含まれた項目のうち因子負荷量の高い上位10項目、および女性性にとっての望ましさの評定値を用いた因子分析で女性性因子に含まれた項目のうち因子負荷量の高い上位10項目を用いて、各々男性性と女性性の達成度を測定した。

各尺度の得点化の方法は、個々の項目に対して「まったくあてはまらない（1点）」から「よくあてはまる（5点）」の5段階で回答を求め、逆転項目の数値を逆転させた上で、各尺度に含まれる項目の得点を合計し、各尺度の項目数で除した値を各尺度の得点とした。得点の範囲は1から5点で、得点が高いほど個々の発達課題の達成度が高いことを示している。

2) 心理的競技能力

心理的競技能力診断検査 (DIPCA: 徳永・橋本、2000) を用いて調査した。この検査は5因子、12下位尺度 (Lie Scale を除く) で構成されているが、本研究では因子の水準で集計した。すなわち、競技意欲 (忍耐力、闘争心、自己実現意欲、勝利意欲の4尺度、計16項目)、精神の安定・集中 (自己コントロール能力、リラックス能力、集中力の3尺度、計12項目)、自信 (自信、決断力の2尺度、計8項目)、作戦能力 (予測力、判断力の2尺度、計8項目)、協調性 (協調性の1尺度、4項目) の得点を算出した。具体的には、個々の項目に対して「1. ほとんどそうでない」から「5. いつもそうである」の5段階で回答を求め、各因子に含まれる項目の得点を合計し、各因子の項目数で除した値を各因子の得点とした。得点の範囲は1から5点で、得点が高いほど個々の因子が優れていることを示している。また、全項目の総合点 (得点の範囲は48から240点) も算出した。

3. 手続き

調査に先立って、調査の目的や方法などを記した調査依頼文および質問紙を学校長や指導者に配布し調査の了解を得た。選手への調査は学校の教室で行い、調査の目的や内容、プライバシー保護の方法などを説明し、同意書にサインを得て調査を行った。

結果と考察

以下の分析は、SPSS21 によって行った。

1. 尺度の信頼性

本研究の対象者は中学選手であり、DIPCA については、中学生から成人用として作成されているので信頼性の問題は無い。しかし、発達課題を測定する尺度には、中学生を含めて信頼性を検討していないものがあり、また尺度の項目数を減らしたり項目の文言を変更したも

もある。そこで、発達課題の尺度については Cronbach の α 係数を算出して信頼性を検討した。各尺度の α 係数は表1に示す通りであり、.49から .86の範囲にあった。親密性と心理的離乳の α 係数は .60よりも低かった。そこで、親密性と心理的離乳の個々の項目が削除された場合の α 係数を検討し、各々1項目を削除することとした。その結果、親密性と心理的離乳の α 係数は、各々 .54と .61となった。さらに項目の削除を検討したが、親密性の α 係数はさほど向上せず、心理的離乳の α 係数は逆に .61より低下した。そこで、親密性と心理的離乳は6項目で構成することとした。

2. 発達課題の達成度と心理的競技能力の性差

発達課題の各尺度および心理的競技能力の各因子と総合点の平均と標準偏差を男女別に表2に示した。男女の平均の差を t 検定で検討した結果、発達課題についてはすべての尺度で男女の平均に有意な差は認められなかった。

青年期前期の男女を対象者として EPSI の尺度得点を検討した研究は少ないが、EPSI のオリジナル版を作成した Rosenthal et al. (1981) は、オーストラリアの9学年と11学年の生徒を対象者として、同一性では男子の方

表1 発達課題の各尺度の α 係数

	7項目	6項目
信頼性	.66	
勤勉性	.63	
同一性	.66	
親密性	.49	.54
心理的離乳	.57	.61
男性性	.86	
女性性	.75	

表2 変数の平均と標準偏差および性差の t 検定結果

	男子		女子		t 値
	M	SD	M	SD	
発達課題					
信頼性	2.88	0.62	2.78	0.68	1.18
勤勉性	3.15	0.61	3.06	0.51	1.13
同一性	3.34	0.66	3.18	0.69	1.76
親密性	3.53	0.64	3.41	0.54	1.49
心理的離乳	3.63	0.57	3.62	0.70	0.06
男性性	3.05	0.70	2.96	0.60	1.01
女性性	2.75	0.56	2.83	0.58	1.04
心理的競技能力					
競技意欲	3.75	0.62	3.52	0.62	2.74 **
精神の安定・集中	3.12	0.82	3.08	0.75	0.33
自信	2.84	0.79	2.48	0.68	3.57 **
作戦能力	2.86	0.72	2.61	0.70	2.56 *
協調性	3.89	0.84	3.88	0.75	0.05
総合点	158.61	23.69	149.56	23.11	2.82 **

*p < .05, **p < .01

が女子よりも達成度が高く、親密性では女子の方が男子よりも達成度が高いことを報告している。また、佐方(1985;佐方・中西,1983)は、高校2年生を対象者として、同一性と親密性では男子の方が女子よりも達成度が高いことを報告している。このように両研究で同一性と親密性の達成度に性差があることが報告されているが、親密性については男女の達成度の高低が逆になっており、この点について佐方(1985;佐方・中西,1983)は社会文化的な要因の影響を指摘している。また、本研究では、同一性でも親密性でも達成度に性差はみられず、同じ日本で行われた佐方(1985;佐方・中西,1983)の結果と異なっていた。このことについては、対象者が各々中学生と高校生であるといった違いが影響しているかもしれない。このように、青年期前期でのEPSIの尺度得点の性差については一貫した結果が得られておらず、今後の検討が必要である。

心理的離乳については性差がみられなかったが、本研究では親や周りの大人からの全般的な心理的依存性の離脱の程度を測定していたことが一因となっている可能性がある。岡本・上地(1999)は、中学生と高校生を込みにした分析で、母親に対する心理的依存からの離脱については性差を認めていないが、父親に対する心理的依存からの離脱の程度は女子の方が男子よりも高いことを明らかにしている。このことから、心理的離乳の性差をより明確にするには、父親、母親、そして周りの大人それぞれに対する心理的依存性の離脱の程度を測定して検討することが必要である。

男性性と女性性については、日本版BSRIを作成した安達ほか(1985)は、大学生を対象者として男性性では男性の方が女性よりも達成度が高いことを報告している。また、佐々木ほか(2009)は、14歳から30歳の双生児に日本版BSRI(安達ほか,1985)を実施し、女性性では女性の方が男性よりも達成度が高いことを報告している。このように先行研究では自己の性に合致した性役割を異性よりも多く獲得していることが明らかにされている。しかし、本研究ではそのような性差はみられなかった。伊藤・秋津(1983)は、性役割観(Masculinity、Humanity、Femininityの重要さの評価)について発達的变化と性差を検討し、中学では男女の性役割観に性差はあるものの萌芽期で、次の高校段階に入ってから改めて自己の性に合致した性役割の重要性を認知し、男女の性役割観の隔たりが大きくなることを指摘している。このことを参考にすると、本研究の対象者は中学選手であり、自己の性に合致した性役割の重要性の認識がさほどなく、男らしさや女らしさの探求・獲得には時期尚早なため、性差がみられなかったと考えられる。

次に、心理的競技能力については、競技意欲、自信、

作戦能力ならびに総合点で男女の平均の差が有意で、すべて男子の方が女子よりも得点が高かった。また、精神の安定・集中および協調性では男女の得点に差は認められなかった。徳永ほか(2000)は、心理的競技能力の性差を検討した研究を概観して、総合的には男子の得点が高く、また、男子は作戦能力、自信、競技意欲(自己実現意欲尺度は除く)で優れ、女子は自己実現意欲尺度、協調性で優れ、精神の安定・集中では顕著な差は認められないと述べている。本研究の結果は、徳永ほか(2000)の指摘と一致する部分が多く、概して一般的な性差の傾向を反映していると思われる。ただし、本研究では協調性での性差はみられず、また、自己実現意欲尺度の得点(4項目の合計点)は男子(M = 15.54, SD = 2.57)の方が女子(M = 14.66, SD = 3.02)よりも高く($t(214) = 2.31, p < .05$)、これらの点は徳永ほか(2000)の指摘とは異なっていた。

3. 変数間の相関

本研究で取り上げた尺度・因子間の相関係数を男女別に算出し、表3に示した。発達課題の尺度のうち、EPSIの信頼性、勤勉性、同一性、親密性の尺度間の相関は、男女ともにすべて有意で正の相関を示した。EPSIのオリジナル版を作成したRosenthal et al.(1981)および日本語版を作成した中西・佐方(2001)も、尺度間に有意な正の相関を報告している。EPSIはエリクソン(1973,1977)の漸成的発達図式に基づいて作成されているが、そこでは、後続する発達段階の課題をうまく解決する人は、前の発達段階の課題をうまく解決していることが予期される(Rosenthal et al., 1981)といった発達課題間の関連が想定されており、EPSIの尺度間に正の相関がみられたことは理論に沿った結果といえる。

性役割の男性性と女性性との間には、男女ともに正の有意な相関がみられた。この結果は、男性性と女性性の達成度が両方ともに高い人が多い、あるいは両方ともに低い人が多いことを示唆している。そこで、男性性と女性性の達成度がともに3(どちらともいえない)よりも高い人と3以下の人の人数を集計した。その結果、男性性と女性性の達成度がともに3よりも高い人は、男子では22人(18.5%)、女子では19人(19.6%)であり、男性性と女性性の達成度がともに3以下の人は、男子では48人(40.3%)、女子では38人(39.2%)であった。このように男性性と女性性の達成度がともに3以下の人の方が、ともに3よりも高い人の約2倍程度人数が多く、男性性と女性性との正の相関は、男性性と女性性の達成度がともに低い人が多いことに起因していたと考えられる。そして、本研究の対象者は中学選手であり、性差の項でも述べたように、男らしさや女らしさの探求・獲得には時

表3 変数間の相関

	発達課題				心理的 離乳	性役割		心理的競技能力					
	EPSI					男性性	女性性	競技意欲	精神の安定・集中	自信	作戦能力	協調性	総合点
	信頼性	勤勉性	同一性	親密性									
信頼性		.55**	.48**	.46**	-.23*	.27**	.12	.31**	.27**	.42**	.21*	.38**	.46**
勤勉性	.28**		.58**	.30**	.04	.47**	.31**	.33**	.30**	.37**	.32**	.31**	.48**
同一性	.56**	.58**		.38**	.08	.33**	.15	.33**	.29**	.41**	.26**	.17	.45**
親密性	.21*	.26**	.32**		.04	.37**	.25**	.32**	.20*	.35**	.38**	.38**	.46**
心理的離乳	-.47**	-.17	-.35**	.14		.27**	.01	.13	.08	.10	.21*	.00	.16
男性性	-.19	.33**	.12	.15	.12		.43**	.49**	.28**	.67**	.67**	.34**	.71**
女性性	-.09	.32**	.09	.18	-.07	.26*		.29**	-.09	.24**	.26**	.43**	.27**
競技意欲	-.04	.37**	.27**	.11	.19	.50**	.24*		-.09	.68**	.55**	.43**	.76**
精神の安定・集中	.31**	.18	.28**	.07	-.14	.15	-.10	.08		.24**	.10	.05	.47**
自信	.04	.33**	.31**	.04	.08	.55**	.04	.67**	.28**		.69**	.36**	.87**
作戦能力	-.01	.31**	.28**	.06	.20	.52**	.10	.64**	.06	.77**		.36**	.75**
協調性	.05	.17	.18	.19	.23*	.18	.23*	.46**	-.09	.27**	.42**		.52**
総合点	.12	.40**	.39**	.12	.13	.55**	.13	.84**	.49**	.85**	.78**	.46**	

注) 対角線の上は男子の結果, 下は女子の結果; *p < .05, **p < .01

期尚早と思われるので、男性性と女性性の達成度が低い人が多いことは了解できる。

心理的離乳とEPSI・性役割の各尺度との相関については、男子では、心理的離乳はEPSIの信頼性と有意な負の相関を示し、性役割の男性性と有意な正の相関を示したのみであった。女子では、心理的離乳はEPSIの信頼性および同一性と有意な負の相関を示したのみであった。このように心理的離乳と有意な相関を示す発達課題は少なかった。また、心理的離乳との相関が有意であった4つの相関のうち3つが負の相関を示しており、心理的離乳は他の発達課題とは性質や機能が若干異なると考えられる。

性役割とEPSIの尺度間の相関については、男子では男性性がEPSIの4尺度と有意な正の相関を示し、女性性はEPSIの勤勉性および親密性と有意な正の相関を示した。女子では男性性と女性性の両尺度がEPSIの勤勉性と有意な正の相関を示したが、その他の尺度間の相関は有意でなかった。このように性役割とEPSIとの関連については、男子では関連する尺度が多いが、女子では少なかった。

心理的競技能力の各因子および総合点間の相関については、男女ともに3つの相関が有意でなかったが、他の12の相関は有意で正の相関を示していた。心理的競技能力は、競技場面で実力を発揮するために必要な能力であり、各因子はこの点で共通する。そのため、因子間に正の相関がみられたことは概念的に妥当な結果といえる。ただし、男女ともに、精神の安定・集中は競技意欲、作戦能力、協調性と有意な相関を示さず、精神の安定・集中は他の因子とは性質や機能が異なる可能性が

示唆される。

発達課題の各尺度と心理的競技能力の各因子・総合点との相関については、42の相関のうち有意な正の相関が男子では35みられ、心理的離乳を除くすべての発達課題が心理的競技能力の各因子および総合点のうちの5つ以上と有意な正の相関を示していた。女子では、42の相関のうち有意な正の相関が17みられ、勤勉性、同一性、男性性の3つが心理的競技能力の各因子および総合点のうちの4つ以上と有意な正の相関を示していた。また、男女ともに、有意な負の相関はみられなかった。これらのことから、概して、発達課題の達成は心理的競技能力の向上に関連するといえる。

4. 発達課題の達成度が心理的競技能力に及ぼす影響

相関分析によって発達課題の達成と心理的競技能力との関連が示されたが、個々の発達課題の達成度が心理的競技能力に及ぼす相対的な影響度については不明である。そこで、この点を検討するために、7つの発達課題の達成度を説明変数とし、心理的競技能力の各因子の得点および総合点を基準変数とした重回帰分析を実施し、その結果を表4に示した。なお、説明変数である7つの発達課題の達成度間には相関係数が.50を超えるような中程度の相関もみられており(表3参照)、多重共線性に注意が必要である。小塩(2004)は多重共線性が発生すると結果の信頼性が低くなり、VIF(Variance Inflation Factor)の値が10を超えると多重共線性が発生していると述べている。そこで重回帰分析における説明変数のVIFの値を調べたところ10を超えるものはみられず、多重共線性の問題は生じていないと考えられる。

表4より、心理的競技能力の各因子および総合点の決定係数 (R^2) は、男女ともにすべて有意であった。標準偏回帰係数については、男子では有意なものが11みられ、そのうち10が正の値を示していた。女子では、有意な標準偏回帰係数が16みられ、そのうち15が正の値を示していた。これらのことから、相関分析での示唆と同様に、発達課題の達成は概して心理的競技能力の向上に影響するといえる。特に、自信と作戦能力の決定係数は男女ともに.40を超えており、これらに対する発達課題の達成の影響は大きいと考えられる。

個々の発達課題の達成度が心理的競技能力に及ぼす影響については、男女ともに、男性性の達成度が協調性を除く4つの心理的競技能力の因子および総合点に対して有意な正の影響を示しており、影響度が高いと考えられる。スポーツの試合は競争性や達成志向性を特徴としているので、これらの特性を有するほど試合での実力発揮、すなわち心理的競技能力も高いと思われる。そして、競争性や達成志向性は男性性に包含されると考えられる(樋口, 1997; 伊藤, 1986)。そのため、男性性の達成度が心理的競技能力に及ぼす影響度が高くなったと考えられる。

男性性の他に、2つ以上の心理的競技能力の因子および総合点に対して有意な正の影響を示した発達課題をみると、男子では信頼性の達成度が自信と協調性の2因子および総合点に対して有意な正の影響を示していた。女子では、同一性の達成度が競技意欲、自信、作戦能力の3因子および総合点に対して、また、心理的離乳の達成度が競技意欲、作戦能力、協調性の3因子お

び総合点に対して有意な正の影響を示していた。これらのことから、男子では男性性と信頼性の達成が、女子では男性性、同一性、心理的離乳の達成が心理的競技能力の向上に影響しやすいと考えられる。

以上のように、本研究では、発達課題の達成が心理的競技能力の向上に関連することが示された。心理的競技能力の強化としては、心理的スキルトレーニングを行うことが一般的であるが、本研究の結果から、発達課題を達成していくことでも心理的競技能力が向上することが示唆される。近年、選手の心理面の強化や支援が活発に行われるようになってきているが、単なる心理的スキルトレーニングの指導にとどまることなく、発達課題の達成といった側面にも開かれた支援が心理的競技能力をさらに向上させると考えられる。

今後の課題としては、本研究で取り上げた発達課題は、中学以降に取り組みが活発となる課題も含んでおり、高校選手や大学選手を対象者とした検討が必要である。また、発達課題の達成と心理的競技能力の向上の因果性を明確にするためには縦断的研究が必要である。

まとめ

本研究では、中学選手を対象者として心理社会的発達課題の達成と心理的競技能力との関連について検討した。7つの発達課題の達成度と心理的競技能力の5因子の得点および総合点との相関を検討した結果、有意な正の相関が男子では35、女子では17みられ、有意な負の相関はみられなかった。また、7つの発達課題の達成

表4 重回帰分析の結果 (標準偏回帰係数と決定係数)

	競技意欲	精神の安定・集中	自信	作戦能力	協調性	総合点
男子						
信頼性	.16	.10	.24**	-.03	.30**	.20*
勤勉性	-.04	.14	-.14	.01	.03	.01
同一性	.12	.09	.17	.01	-.13	.11
親密性	.06	.06	.00	.17*	.18	.12
心理的離乳	.06	.02	-.03	.02	.05	.04
男性性	.34**	.26*	.65**	.62**	.07	.58**
女性性	.09	-.29**	-.06	-.05	.33**	-.06
R^2	.30**	.21**	.53**	.47**	.33**	.61**
女子						
信頼性	.02	.29*	.08	.08	.16	.18
勤勉性	.13	.03	.08	.06	-.04	.09
同一性	.27*	.11	.29*	.32**	.23	.33**
親密性	-.13	-.04	-.18	-.19*	-.02	-.16
心理的離乳	.30**	.01	.19	.32**	.39**	.30**
男性性	.38**	.22*	.53**	.47**	.08	.50**
女性性	.13	-.14	-.09	.00	.25*	.01
R^2	.38**	.17*	.41**	.40**	.20**	.48**

* $p < .05$, ** $p < .01$

度を説明変数とし、心理的競技能力の5因子の得点および総合点を基準変数とした重回帰分析を実施した結果、男女ともにすべての分析で決定係数が有意であり、標準偏回帰係数については、男子では有意なものが11みられ、そのうち10が正の値を示し、女子では有意なものが16みられ、そのうち15が正の値を示していた。これらのことから、心理社会的発達課題の達成は概して心理的競技能力の向上に関連すると考えられた。さらに、重回帰分析の結果より、男子では男性性と信頼性の達成が、女子では男性性、同一性、心理的離乳の達成が心理的競技能力の向上に影響しやすいと考えられた。

謝 辞

調査に際し、多くの先生・指導者および選手の方々にご協力いただきました。記して感謝申し上げます。

付 記

本研究は、JSPS 科研費22500572、26350742の助成を受けたものです。

文 献

- 安達圭一郎・上地安昭・浅川潔司 (1985) 男性性・女性性・心理的両性性に関する研究 (I) : 日本版 BSRI 作成の試み. 日本教育心理学会第27回総会発表論文集, 484-485.
- Blos, P. (1967) The second individuation process of adolescence. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 22: 162-186.
- ブロス : 野沢栄司訳 (1971) 青年期の精神医学. 誠信書房 : 東京. (Blos, P. (1962) *On adolescence: A psychoanalytic interpretation*. Free Press: New York.)
- エリクソン : 小此木啓吾訳編 (1973) 自我同一性 : アイデンティティとライフサイクル. 誠信書房 : 東京.
- エリクソン : 仁科弥生訳 (1977) 幼児期と社会1. みすず書房 : 東京.
- 樋口康彦 (1997) 性役割認知と達成動機の関係についての考察 : 大学生男女を対象にして. *青年心理学研究*, 9 : 19-30.
- 伊藤裕子 (1986) 性役割特性語の意味構造 : 性役割測定尺度

- (ISRS) 作成の試み. *教育心理学研究*, 34 : 168-174.
- 伊藤裕子・秋津慶子 (1983) 青年期における性役割観および性役割期待の認知. *教育心理学研究*, 31 : 146-151.
- 泉 重由美 (2003) 性役割観についての研究 第2報: 日本の性役割観の現状. *日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科*, 9 : 25-32.
- 上地雄一郎・上地玲子 (2004) ホフマンの心理的分離質問票の妥当性の検討. *甲南女子大学研究紀要*, 40 : 19-25.
- 中西信男・佐方哲彦 (2001) EPSI : エリクソン心理社会的段階目録検査. 上里一郎監, *心理アセスメントハンドブック第2版*. 西村書店 : 東京, pp. 365-376.
- 西平直喜 (1990) 成人になること : 生育史心理学から. 東京大学出版会 : 東京.
- 岡本清孝・上地安昭 (1999) 第二の個体化の過程からみた親子関係および友人関係. *教育心理学研究*, 47 : 248-258.
- 小塩真司 (2004) SPSS と Amos による心理・調査データ解析 : 因子分析・共分散構造分析まで. 東京図書 : 東京.
- Rosenthal, D.A., Gurney, R.M., and Moore, S.M. (1981) From trust to intimacy: A new inventory for examining Erikson's stages of psychosocial development. *Journal of Youth and Adolescence*, 10: 525-537.
- 佐方哲彦 (1985) 青年期の同一性形成 : EPSI による発達課題の達成過程の解明. *青少年問題研究*, 34 : 49-64.
- 佐方哲彦・中西信男 (1983) 青年期の自我発達に関する研究 : エリクソン心理社会的段階目録 (EPSI) による検討. *日本教育心理学会第25回総会発表論文集*, 154-155.
- 佐々木掌子・山形伸二・敷島千鶴・尾崎幸謙・安藤寿康 (2009) 性役割パーソナリティ (BSRI) の個人差に及ぼす遺伝的性差・環境的性差. *心理学研究*, 80 : 330-338.
- 竹之内隆志・奥田愛子・大畑美喜子 (2012) 運動選手の自我発達プロセス : 危機事象の発達の变化に基づく検討. *体育学研究*, 57 : 379-398.
- Takenouchi, T., Taguchi, T., and Okuda, A. (2004) Relationship of sports experience and ego development of adolescent Japanese athletes. *Psychological Reports*, 95: 13-26.
- 徳永幹雄 (2001) スポーツ選手に対する心理的競技能力の評価尺度の開発とシステム化. *健康科学*, 23 : 91-102.
- 徳永幹雄・橋本公雄 (2000) 心理的競技能力診断検査用紙. トーヨーフィジカル : 福岡.
- 徳永幹雄・金崎良三・多々納秀雄・橋本公雄・高柳茂美 (1991) スポーツ選手に対する心理的競技能力診断検査の開発. *デサントスポーツ科学*, 12 : 178-190.
- 徳永幹雄・吉田英治・重枝武司・東 健二・稲富 勉・斉藤孝 (2000) スポーツ選手の心理的競技能力にみられる性差, 競技レベル差, 種目差. *健康科学*, 22 : 109-120.

